
これも恋の始まり？ 2 ～花恋舞 Karenbu～

山口維音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これも恋の始まり？2〜花恋舞 Karenbu〜

【Nコード】

N2347A

【作者名】

山口維音

【あらすじ】

親に反対されながらも、自分の道を歩もうと決意した倉田梓18歳。ある日、大学へ向かう途中で見かけた美しい舞を披露する彼。その時、確かに彼女の心の中で何かが芽生え始めていた。同じ様で、違う運命の中を生きている……そんな男女二人の花恋舞。「これも恋の始まり？」シリーズ第2弾

序章 今、幕が開けられる（前書き）

この物語は夏海・梓・蓮子を主人公にした物語のシリーズ物です。シリーズ第2弾では梓を主人公にした物語「花恋舞」Karenburi」を連載していきたいと思えます。主人公それぞれの不器用ながらも、次第に咲かせる恋の花。また、彼女たちの恋愛以外の悩みもたくさん……。それぞれが歩んでいく道をこれから見守って下さい。物語の設定は、前作よりも1年前の彼女たちが大学に入学したばかりの頃です。

序章 今、幕が開けられる

出会いは本当に奇跡だった……。

親への反発で、初めて歩いて通学した時に聴こえたあの音色……。

そして、悪いと思いつながらも勝手に覗いた他人様の家の中で見つけた、あの美しい舞を披露していたあなたの姿……。思わず時間が過ぎるのも忘れてしまいそうになる、あの心地よいひととき。その時、確かに私の心には何かが芽生えていた。

そして、再び訪れたあなたとの出会い……。

何度も起こっては、奇跡とは言えないけれど……

すべてにおいて、どれも私にとっては本当に奇跡だった。

あなたと私は、同じ運命を背負っているようで実は全く違う……。二人の間には、大きな違いがあった。それは……。あなたは自分の意志をはっきりさせているのに対して、私は……。自分の意志をはっきり伝えられていない所。

そんな私を変えてくれたあなた……。あなたの存在、言葉、行動全てが一つ一つ私の心の隙間に入ってくる。隙間がいっぱいになった頃、私はあなたに惹かれていた。

私を変えてくれたあなたは、今でも私の心の中で舞い続けている。初めて見た時と変わらない華麗な舞を……

そして、出会った頃とは全く変わった私たちの運命は今……

序章 今、幕が開けられる（後書き）

こんにちは！ ヤマグチです。シリーズ第2作目“花恋舞〜Ka renbu〜”を連載開始する事が出来ました！ 前作完結から、かなり遅くなつて申し訳ございません。今回は、前作よりも1年前の設定です……ので、尚弥はいません。夏海の恋人はもちろん、賢一です。これから、梓と伊織の恋模様を是非楽しんで頂けたらと思っております。頑張りますので、よろしくお願い致します！！

R e n b u 1 導かれし二人の出会い（前書き）

Renbu 1 導かれし二人の出会い

今日から大学生活の始まりの日。

「それでは、行ってまいります」

食事中の両親に声を掛けて、そのまま玄関の方へ足を進める。

「梓、私達は認めないからな」

父の一言に一瞬足を止めたけれど、返事をする事も無く私は家を出た。

倉田梓 18歳。大学の医学部一回生。

医学部に入ったからには、もちろん将来は医者になりたいと思っ
てはいるけれど……。

「お嬢様、お車に」

「結構です。今日は自分で行きますから」

運転手の誘いを断ると、そのまま歩いて大学へ向かう。

私の父親は医者ではなく政治家で、母親はそんな父の秘書をして
いる。そんな両親は私を自分たちの跡を継がせようと昔から口にし
ていたが、私はそれを医学部に進学した事で裏切った。

「私たちの娘が、跡を継がずに医者なんかになりたいなんて！」
親に経済学部に入ると嘘をついたのがバレた日、母親はそう言っ
て嘆いていた。そんな母に対して、父親からは言葉なんて無い。た
だ平手打ちをされただけ……。でも、両親に嘘をついた私にとって、
たくさんの罵声よりその方が辛く感じた。

両親から何もかも反対されていた私がこうして入学できたのは、
父方の祖父が懸命に両親を説得してくれたからだ。

祖父もまた両親と同じく政治家だが、私の進路については私の意

思を尊重してくれていた。

両親は、政治家としても親としても頭の上がない祖父の説得にしぶしぶ医学部の進学には承諾したが、あくまでそれは四年間の学生生活だけで、まだ私を政治家の道に進ませる事を諦めていなかった。そんな理由で、こうして顔を合わせては同じ事を言われ続けていた。

「あら？」

しばらく歩いていると、ふと三味線の音色が聞こえてきた。

その綺麗な音色に、思わず足を止めて音色が発せられる場所を探してしまう。すると、その音色は角の大きな和風のお屋敷から聞こえてきた。ふと見ると、そのお屋敷の勝手口が少しだけ開いていた。「ちよつとだけなら、いいよね……」

わずかに開いていた勝手口から、お屋敷の中を覗いた。

その時、私の視界に映ったものは、三味線の音色に合わせた私と同年代くらいの男の人の華麗な舞だった。

「素敵……」

思わず言葉をこぼしてしまう程、彼の舞は華麗なものだった。流れるような動きを見せる彼の舞を見ていると、時間が過ぎるのを忘れてしまいそうだった。いや、忘れてしまってもいいと思った。

ゆつくりと勝手口から出ると、まだ鳴り止まない三味線の音色に再び立ち止まってしまった。普段、この辺は車で通り過ぎてしまうから三味線の音色には気付かないでいた。

親への反発から、自分で通学しようと決めた事でこんな素敵ものに出会えるなんて。

「今度は、ちゃんと正面から見たいな」

そう呟くと、再び大学へ足を進めた。でも、名も知らない彼にどの様にして舞を見せてもらえたらいいのか……。しかも、勝手口か

ら進入して見ましたなんて恥ずかしくて言えない。

そんな私は、やがて巡ってくる奇跡を知る事もないまま大学へ向かった。

R e n b u 1 導かれし二人の出会い（後書き）

第二回終了です。読んで頂き本当にありがとうございます！

Renbu2 友達からの誘い(前書き)

大学生になってから、自分で通学しようと決心した日……偶然聴こえてきた三味線の音に惹かれて、あるお屋敷を覗いたら、華麗な舞を披露する彼がいた。

叶う事なら、もう一度彼の舞を観てみたい……。

Renbu 2 友達からの誘い

入学式を終えて、今日から始まる大学生活……。医学部専攻の私の周りにはほとんどが男の人だった。そんな中で友達はまだ出来ていなかったけど、他学部には仲の良い友達がいた。

「梓〜！ おはよう！」

声のする方を振り返ると、友達の夏海ちゃんが走って来た。

「夏海ちゃん！ おはよ……」

私が言い終わる前に、夏海ちゃんは私に抱きついてきた。彼女、槻岡夏海ちゃんは高校の時から友達。そして……

「おはよう、梓。今日もかわいいね〜」

「きゃ〜！ きゃ〜！ きゃ〜！」

挨拶と同時に抱きついてきた、夏海ちゃんと一緒にいた男の子は宇佐美琉依。彼もまた、同じく高校からの友達。夏海ちゃんと琉依は幼馴染みで、近所に住んでいるからこうして一緒に大学へ来ていた。

琉依はこうして、私と顔を合わせると必ず抱きついてくる。そして、その度に悲鳴をあげ続ける私。

「そろそろ離れな！ バカ」

そう言って、夏海ちゃんが琉依の頭を殴っていた。そのおかげで、やっと私は琉依から自由になれる……と、今までずっとこんな事の繰り返し。

「梓、今日は車じゃなかったの？」

琉依が辺りを見ながら、話しかけてきた。いつもなら傍にいる筈の運転手が、今日はいないせいもあってか、琉依も違和感を感じていたのだと思う。

「うん、これからは自分で通学しようかなって思ってた」
少し笑いながら答えると、琉依は納得したように頷いていた。その横で、夏海ちゃんは少しだけ笑みを浮かべて尋ねてきた。

「ご両親への反発？」

そんな問いに、私はただ笑顔で返した。

医者になりたいと思っっている限り、両親の力を借りないようによろしく思っていた。それくらい自分の意志は固いものだとして、両親に分かって欲しいという私の思い……。大した事は出来ないけど、少しはわかってくれるかな。

「梓の気持ちも、ご両親に分かってもらえるといいな」

夏海ちゃんと琉依には、高校の時に相談をしていたから私の気持ちをよく理解してくれていた。

二人共それぞれ色々な悩みがあった筈なのに、いつも私の話を聞いてくれていた。進路についても、親にどうしても話せなかった私の本当の気持ちを二人は真剣に聞いてくれた。そんな二人には本当に感謝している。けれど、頼ってばかりじゃいけない……。これは、私自身の問題なのだから……。

「夏海〜！」

声のした方を振り返ると、夏海ちゃんの彼氏である賢一君が手を振っていた。そんな彼に、夏海ちゃんもまた笑顔で手を振っていた。

「それじゃあ、私行くね」

そう言っつて、夏海ちゃんが走り去って行ったその時、私に残されたのは……

「やっと二人きりになれたね、ハニー」

そう言っつて、いつものように抱き締めて来る琉依。いつもと同じ事なのに、やっぱり私は、

「きゃ〜！ きゃ〜！ きゃ〜！」

と、叫んでしまう。琉依から離れようと手足を動かしていたら、琉依のポケットから何かが落ちてきた。

「ああ……、忘れていたよ」
琉依がそれを拾ってくれたおかげで、私は何とか自由の身になっ
た。

「梓、今夜ヒマ？」

「今夜？ え、ええ」

私の返事を聞くと、琉依は笑顔でたった今拾った紙を渡してきた。
その紙を受け取って見ると、それはチケットだった。

「鷹司……紫柳……？」

チケットに書かれていた名前の横には、“日本舞踊”の文字が記
されていた。

日本舞踊……。ふと、今朝の出来事が頭をよぎる。華麗な舞を披
露していた、名前も知らない彼……。

「俺や夏海の小学生の頃からの友達なんだけど、これが結構美し
い舞を見せるんだ。梓、こういうの興味ないかな？」

こういうものは、よく両親と観に行っていたけど、その時は正直
興味なんて無かった。けれど今朝の彼の舞は、私が今まで観たもの
とは全く違っていた。彼の舞は、短時間で私の心を惹きつけていた。

「ううん、行きたいな……」

琉依の誘いを受けると、琉依は何かを思い出したかのように手を
叩いた。

「そうそう、こいつの家って梓の家の近くなんだけど知ってる？」

「え……？」

これは何かの偶然？ それとも奇跡？

タカツカサ シリユウ

“鷹司紫柳”が、今朝の彼でありますように……そんな期待も秘
めて、あの華麗な舞を見せる彼への想いがさらに強くなっていくの
を感じた。

私の心の中では、今朝の彼はまだ舞を踊り続けていた。

Renbu 2 友達からの誘い（後書き）

三回目で登場しました、夏海&琉依。ここでも、琉依の大暴走を書いてみました。いつか、蓮子と渉も登場させたいと思っています。琉依の大暴走は……まだまだ続きますよー!!

Renbu 3 嬉しきかな？ 再会の巻

この日の講義が終わったあと、医学部棟を出た私を待っていたのは……

「やあっ！ 待っていたよ梓」

愛車にもたれかかって立っていた琉依の姿を、周りの人たちが見ていた。

憧れの存在である琉依の姿を遠くから見ている女性たちに向かって、琉依はニコニコと笑顔で手を振っていた。

そんな彼に対して、思わず気を失いそうになるのを堪えながら、私は琉依の車に乗り込んだ。

「今日、夏海ちゃんは行かないの？」

軽快に運転する琉依に聞くと、琉依はこちらを見ずに頷いた。

「賢一クンと出掛けるみたいですよ」

だから、私を誘ったのかな？ いつもなら、どこかに行く時は絶対夏海ちゃんを連れて行くから。

「舞台が始まる前に楽屋に行くけど、梓も一緒にどう？」

急に琉依は話題を変えてきた。あまり触れられたくない話だったのかな。

「私なんか、初対面なのに行ってもいいの？」

本当は初対面じゃない（と、思う）けど、実は勝手に家に覗いていました……なんて、いくら琉依でも言えなかった。

「大丈夫ですよ。あいつはそんなの気にするような奴じゃないし私が気にする！ もしかしたら、今朝の彼かもしれないのに……。

いきなりそんなに近付いたら、どうしたらいいのか分からなくなっちゃう。

「どうせ俺のツレだっと思って思うだろうし、気にする事無いですよ」
琉依のツレ「彼女？ 尚更嫌だ！ 琉依には悪いけど、心からそう思った。本当に彼だったら、変な誤解はされたくないし。まだ、これから会う“鷹司紫柳”が彼と分かった訳ではないのに、私の中では今朝の彼と決め付けていた。

「舞台の上での奴と、上がる前の奴を比べてみるのも結構面白いですよ？」

楽しそうに話す琉依を見ると、ちよつと興味が出てきた。緊張するし誤解もされたく無いけれど、舞台を降りた彼も見たいと思つた。

「うん、じゃあ連れてって」

笑顔で答えたその時、私の手を握る琉依の……両手？

「可愛いなあ。いつそのこと、俺の部屋に連れて行きたくなるな

あ

「ハンドル握ってええっ！」

琉依の手が離れたハンドルは自由になり、もちろん車は操作されることも無くフラフラと暴走していた。

「……降りたい」

軽快に運転を再開する琉依を見て、心から思った言葉が自然と口から出ていた。

「着きましたよ」

琉依はそう言うと、ホールの関係者用の駐車場に車を停めた。そこから、開場を今か今かと待つ長蛇の列が見えた。

「凄いでしょ？ それくらい人気があるんですよ」

琉依はそう言うと、私を楽屋へと案内してくれた。

関係者しか通れない通路を歩き、徐々に近付いているのを意識するだけで胸がいつぱいになる。

“初めまして！”

“あなたのファンです！”

なんて、何を言おうか心の中で思ったり……。
前を歩く琉依は、そんな私をよそに綺麗な女性達に手を振っていた。

「ここで、待っていて」

琉依は立ち止まってそう言うと、“鷹司 紫柳様”と書かれた楽屋へと入って行った。

「入るぞ〜」

そんな琉依の声を聞こえてはいたが、私の心の中は余裕が無いくらい緊張感でいっぱいだった。

でもよくよく考えてみると、今朝の彼とは限らない。もしかしたら全くの別人かもしれないのに、私の中の期待は徐々に大きく膨らむばかりだった。

「あつずさ〜！ 入っておいで」

琉依の声で我に返ったが、なかなか足を進める事が出来なかった。

「梓？ 緊張しているの？」

琉依はそう言うと、私の手を掴んでそのまま楽屋の中へと誘った。

「ちよっ、ちよっとうと琉……」

言いかけた時私の視界に入ったのは、私を夢中にさせた舞を披露した彼だった。願いが現実のものとなり嬉しい筈なのに、私はただその場で立ち尽くすしか出来なかった。

「梓？ 大丈夫かなあ？」

琉依が顔を覗いてきたが、私はまだ呆然としていた。憧れの人が目の前にいて、私を見ている……。遠い存在と思っていたのが今、私の……

「あつら〜？ あたしの美しさに見とれて声も出ないのかしら？」

……えっ？

「ちょっと、琉依。可愛らしい女の子じゃないの」
え……ええっ？

一体、私の目の前で何が起こっているのか。確かに、私の目の前にいるのは今朝の彼なのに、その口から発せられるのは……
啞然としている私の前に向かって、彼は近付いてきた。そして、綺麗な笑みを見せると

「鷹司紫柳こと、東條伊織よ。よろしくねん」

あっ……

「あっ、梓！？」

琉依の声もむなしく、私はその場で気を失ってしまった。

神様……、いるならどうか今起こった事を無かった事にして下さい……

R e n b u 3 嬉しきかな？ 再会の巻（後書き）

皆様こんばんは！　そしてお久しぶりです。この度、やっと腕の調子が元に戻りましたので復帰させて頂くことになりました。読んで下さっている皆様、大変お待たせして申し訳ございませんでした。これからも頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。また、後日（または同じ日に）尚弥の話も連載開始させて頂きます。第1弾と読み比べて頂けると幸いです。

R e n b u 4 理想と現実のギャップ（前書き）

琉依のおかげで、憧れていた彼と再会出来たのは良かったけれど、現実の彼はおねえ言葉を惜しげもなく披露する“女”の性格を兼ね備えた人物だった。

Renbu 4 理想と現実のギャップ

空中を軽やかに舞う蝶の様に、彼の舞はとても綺麗で思わずため息が出るほどだった。

いつまでも色あせる事無く、その光景を心の中に残しておきたい。いつ見れるかも分からないのだから、あの時見た美しいままで……

「う、う……ん」

目が覚めると、とてもいい香りがしてきた。あれは夢だったの？

「あら？ 気が付いたの？」

その声を聞いた途端、くらくくと再び気を失いそうになった。何とか気を保ちながら声のする方を見ると、そこには先程までおろしていた長い髪を綺麗に結った彼（彼でいいのよね？）の姿があった。

「る、琉依は？」

「琉依なら、え〜っと何だっけ？ ああ、アオリンを買いに行つたわよ」

アオリンを？ アオリンとは、私の好きな飲料の名前だった。わざわざ買いに行ってくれているなんて、普段はあんなにふざけた行動を見せていても、本当は優しい人なのだ。

けれど琉依がいなくなってしまうては、二人きりの楽屋……何を話したらいいか分からない。彼は化粧に取り掛かっていた。

「じ、自分で化粧されるのですね」

「や〜ねえ。敬語なんて使わないで頂戴よ。体中が痒くなっちゃっわ」

そう言われても……いくら琉依の親友と言っても、私にとっては初めて話す人だから。

「小さい頃から教えられてきたからね。化粧くらいは自分で何とかできるわよ」

適当・適当と笑いながらも、慣れた手付きで、どんどん鮮やかな仕上がりとなっていた。

「ねえ、さっき気を失った原因はあたしの言葉遣いにあるのかしら？」

化粧をしている手を止めずに、私に話しかけてくる。確かに、原因は彼の外見からは想像できない言葉遣いにあっただけれど、まさか即答できる筈も無く返答に困ってしまった。

「やくねえ。無言って事は“はい”って言ってるようなものよ」「クスクスと、女性らしく彼は笑っていた。そんな彼の言葉に、私は思わず顔が赤くなる。

「ほぐんと、可愛いわねえ。琉依には勿体無いわね」

「ち、違います！ 私は琉依の彼女なんかじゃありません！」

ほら、やっぱり勘違いされているし。けれど、誤解されてもそんなにショックじゃなかったのは、やっぱり彼のギャップが私の中にあっただ彼の理想像を壊したのが原因だと思う。

ガチャッ

「おまつとさん……あれ？ 梓、気が付いたんだ」

ドアの開く音と共に、琉依が入ってきた。

「はい、アオリン」

私にアオリンを差し出すと、琉依はそのまま彼の方へ行った。

「伊織には、これ」

アオリンと共に持っていた大きな花束を、琉依は彼に渡した。花束を受け取ると、彼は中に入っていたカードを見ていた。

「いつものよね。悪いわね」
そう言つと、彼は花束を置いて化粧の仕上げにかかり始めた。

「ああ、そうだね。ねえ、舞台が終わつたら三人でご飯食べに行きましようよ！」

「えっ!?!」

突然の彼の申し出に思わず変な声を出してしまい、隣にいた琉依がそれを見て笑いながら彼に“OK”のサインを出していた。そんな、私の返事も聞かないで……

「やった！　じゃあ、決まりね」

私の気持ちを無視して二人は何か話を進めていった。行きたくない訳じゃないけど、まだこれまでの状況を把握していないのだからとりあえず落ち着きたいのに。

コンコンツ

「紫柳さん、お願いします」

「はい。分かりました」

スタッフの呼び出しに明るく返事すると、彼はゆっくりと立ち上がった。綺麗な衣装や化粧に包まれた彼の表情は、とても真剣でさつきまでとは違って一人の役者としての雰囲気を感じられた。

「じゃあ、行ってくるわね」

「おう！　その美しさでババア共を悩殺して来い！」

琉依と拳をぶつけ合つと、彼は私に手を振つてから楽屋を後にした。

「じゃあ、俺たちも行きましょうね」

琉依はそばにあった私の荷物を持つと、私の前に靴を並べてくれた。こういう事も平然とやってのけるんだから……そんな目で琉依の方を見ると、こちらに気がついた琉依は笑顔を見せてくる。

「紳士ですから」

そんな琉依の頭を軽く叩き、私達は楽屋を後にした。

Renbu 4 理想と現実のギャップ（後書き）

こんにちは！ 半年振りの再開です！ 長い間お待たせして本当に申し訳ございません！ シリーズ4作目の方に集中していただいてこちらの方が疎かになっていました。きちんと完結させますので、これからどうぞよろしくお願い致します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2347a/>

これも恋の始まり？ 2 ～花恋舞 Karenbu～

2010年10月12日07時44分発行